

よい語り わるい語り スタッフに人を得ること

「みんなでものがたりの海に船をだす」というのが、ぼくのものがたりライブのイメージだ。

その場合、ぼくは船長兼航海士でオーナーではない。
船のオーナーはぼくを呼んでくれる行政体であり、図書館であり学校だったりする。

オーナーは関係する人々に直接「ものがたりの海に出てもらいたい」と思ったりもっと広義に「楽しい時間もしくは有意義な時間を提供したい」と思ったりしてぼくをやとう。

ぼくはやとわれ船長として日時の契約をして会場に出向き、
オーナーもしくはその代理人から「なにか条件があれば」と話をうかがう。
オーナーによって「こんな話をに入れてほしい」と言われることもあれば「おまかせで」と言われることもある。

中には「子どもたちが本好きになるようにしてほしい」とかの一度でどうなるものでもない注文をつけられることもある。

そういうときもオーナーの顔もそれなりに立ち、
客も楽しめ、ぼく自身もまた呼んでもらえるように、
バランスのいいステージにするよう心掛ける。

小さなところで大義に殉じて反発するより、また呼んでもらって
その子どもたちと時を重ねることの方がずっと大事なのだ。

とにかく、ゴルゴ 13 よろしく、できるかぎり、みんなの期待に応えるようにする。
それは最低の義務だ。

で、聞き手はもちろん船の乗客だからとりあえず楽しんでもらえればいいのだが
でも、ぼくは同時に心の深いところで乗組員として働いてほしいと思っている。

「さあ、おもしろがらせてもらおうか」とあぐらをかいているお客はだめ。
客もまた、自分のキャリアをいかして「さあ、いっしょに行きますよ。
私はなにをすればいいですか？」と腕まくりしてくれるくらいの方が最高。
といって、具体的になにをするわけでもないのだが、気持ちの問題。

その場にいる人全員の合計点が高いほど、遠くの海に行けるのだから
各自の持ち点もだしてもらいたいのだ。

子どもたちの前で話をするとき、ときどき、ねっころがったりする子がいる。

で、これをやられるとぼくは話ができなくなる。

もちろん、楽な格好で聞いてもらえばいいのだが、それにしても

「ぼくはおまえの家来ではないぞ。なんで、ご機嫌をうかがわなければならぬんだ？」という気が頭をもたげてくる。

中には「ねっころがって聞いてくれてもいいんだよ。それでも聞いている子はちゃんと聞いているし、こちらの腕が良ければすわりなおして聞いてくれるんだから」と言う語り手と会ったことがある。

だが、ものわかりがいいように見えてそれは違う。

「おもしろければすわりなおす」のは、すでに「うまいへた」がわかるほどたくさんのお話を聞いている聞き手の場合だ。

そんな子はいくらもない。

噺家の昔話に「昔の寄席は辛口のお客がいくらもいて、つまらない若手の時はわざと寝ていたり、本を読んでいたりしたもんだ。そういうところで我々は鍛えられた」なんていうのがあるけれど、ぼくにいわせてもらえばそのお客たちはろくなものではない。ただのいじわるじいさんだ。

なぜなら、たくさんのお話をちゃんと聞いて、たくさんのお話や登場人物に共感したり、反発したり、ものがたりの中を旅してきた人というのは自分の心を相手の側に置いて相手の立場に立ってものごとを考えられるようになっているはずだからだ。

互いにリスペクトし、サポートしあう関係のときに、いい話は生まれるのに決まっている。

で、今、一番大事で必要なのは、よい乗組員だと思う。

この人たちは客とはまた少し違うポジション。

つまり、船長とは別のところで

ある程度、独立して動いてくれる、甲板長とか船大工とか操舵手とか料理長とか貨物係とか鉬撃ちとかにあたる人たち。

船長と客がいればなんとかなるのは自宅や文庫でする規模のおはなし会だ。

だが、もっと大勢で会議室やホールや体育館でする場合にはさまざまところで気を配って、会を成功させようとしてくれる人がいてくれないとうまくいかない。

宣伝や受付や会場整理にチケット販売にゲストの接待に危機対応まで。

船長だけではちょっとしたハプニングにさえ対応できないが優れた乗組員は事前にトラブルになりそうな芽を次々に打ち消していつてくれる。

言い方を変えると乗組員は「語り手」と「聞き手」の間に立つ「つなぎ手」ともいえる。

語りをする人たちはそれなりにいるし、語りをする人たちが集まってサークルを作ることもある。

だが、それはへたをすると「船頭多くして船、山に登る」になりかねない。みんなが語り手では人を集められないし、ケアできない。

語り手が互いに聞き手になりあって、なにかやった気になっているだけだ。

語り手は、どうしたら「つなぎ手」と呼べる人たちを作り、お願いできるのか？

具体的には、母親、父親、先生、司書、その他ものがたりや本が好きな人、子どもに関することに関心がある人もろもろの中に

自分は語りをしなくても、子どもともものがたりの世界をつなぐことに意味を感じて、そういう会を開きましょう、応援しましょうという人たちがどれだけ生まれてくるか？

ここにどれだけ、優秀な人材が得られるか？

むずかしいけれど、ここを考えないと語りの世界に未来はなく、語り好きな人のカラオケ大会になってしまう。

とりあえず、夏のパークのものがたりライブはここに人を得られたから、船をだせたのだと思っている。

話の会は「語り手」と「聞き手」で成り立っていると、ずっと思われてきた。違う。

「語り手」と「聞き手」と「つなぎ手」がいなければ続かない。

「つなぎ手」という存在をまず認識することから始めよう。